

【個人研究】

高校生に対するキャリア学習の実践的効果

正木 澄江*

Practical Effects of Career Learning on High School Students

Sumie MASAKI

The purpose of this study was to verify the practical effects of career learning on high school students. Study 1 examined the changes before and after career learning. After the program was implemented, the image of working was positive, and career choice self-efficacy increased. Study 2 examined the program's effects after a year, and results revealed that career choice self-efficacy reverted to its pre-program level. However, students who perceived the effects of career learning had greater interest in the future and clearer goals. In contrast, students who did not perceive the effects of career learning claimed they had no opportunity or time to make use of what they had learned or they were not able to find a connection between that learning and their lives as students. These results indicated the importance of efforts to have students find meaning in career learning and to adopt it to daily life and learning.

Keywords : high school students, image of working, career education, career learning program, practical effects
高校生、働くことのイメージ、キャリア教育、キャリア学習、実践的効果

問題と目的

キャリア教育は、1999年12月の中央教育審議会の答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」において初めて公的に登場し、その必要性が提唱された。こうした背景には、学校から社会への移行をめぐり、社会的環境の変化、若者自身の資質、子どもたちの生活・意識の変容等から、学校教育に求められるものが変化してきたことが挙げられる。その後、中央教育審議会（2011）の答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方についての答申」の中で、キャリア教育は「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」と定義されている

（中央教育審議会、2011）。

国立教育政策研究所（2013）によれば、キャリア教育の全体計画がある高校は7割で、年間指導計画は8割の高校が作成しているものの、その内容は進路指導や体験的な学習が9割を占めている。また、キャリア教育の充実に向けた担任の意識も低く、校内研修のキャリア教育に参加したことがない担任は5割に及んでいる。キャリア教育の担い手として、進路指導主事または兼任が8割弱と最も高いが、その在任期間は6割以上の高校で3年未満とされている。高校の進路指導主事を対象とした調査（リクルート進学総研、2014）によれば、キャリア教育の実施時間は、「総合的学習の時間」が約8割、「ロングホームルーム」が約7割に達しており、別枠で学校設定科目の時間を設置する高校は1割にも満たないことが報告さ

* まさき すみえ 文教大学人間科学部心理学科

れている。つまり、キャリア教育という言葉は教育現場に浸透し取り組みは行われているものの、その内容や成果に対する評価は不十分であり、その背景には一部の担当者のみで実施されている現状も見られ、継続的な内容の見直しやその効果についての検討が難しい状況が推察される。

他方、高校の進路指導・キャリア教育に関する調査では、キャリア教育への期待は増加傾向にあり、高校においてもその重要性が理解されつつある。またキャリア教育の効果として、生徒の意欲や満足度の向上をあげた高校は4割を超え、キャリア教育担当部署の存在価値の増加も付随して見られる。さらに、キャリア教育について組織的・体系的な指導計画を作成している高校ほど、生徒の意欲や学力が増加する傾向が見られるとの報告もある(リクルート進学総研, 2014)。キャリア教育が、今後、教育現場に浸透していくには、生徒や教師、さらにはキャリア教育担当者が、その効果を実感することが大きく影響していると考えられる。

こうした課題も踏まえ、2017年に改訂された学習指導要領では、社会に開かれた教育課程の実現に向けて、「何を学ぶか」という指導内容の見直しに加えて、「どのように学ぶか」「何ができるようになるか」という視点が強調されている。さらに、「生きる力」を育むための3つの資質・能力として、①生きて働く知識・技能の習得、②未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力等の育成、③学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性の涵養が示されている。キャリア教育に関しては、「生徒が、学ぶことと自己の将来とのつながりを見通しながら、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身に付けていくことができること」や、「生徒が自己の在り方生き方を考え主体的に進路を選択すること」ができるよう、学校の教育活動全体を通じ、組織的かつ計画的な進路指導を行うことが掲げられている(文部科学省, 2018)。高等学校教育におけるキャリア教育は、ある程度浸透しているものの、未だ狭義の進路指導との混同があることや、「働くこと」の現実や必要な資質・能力の育成につなげていく指導が不十分であるなどの課題

も指摘されている。

そこで本研究では、首都圏内の中高一貫校(A校)におけるキャリア学習の効果について検討し、今後のプログラム開発への示唆を得ることを目的とする。

A校では、毎年高校1年生を対象に、5日間のキャリア学習プログラムを実施し、学びの活性化や進路選択に対する関心を高めるための取り組みを行っている(表1)。著者がプログラム冒頭の基調講演の依頼を受けたことを機に、プログラム全体の効果について検討する試みがなされた。

キャリア学習のプログラムは、主に(1)キャリアに関する基調講演、(2)大学教授らによる特別講座、(3)社会人へのインタビュー、(4)ポスター発表とプレゼンテーションから構成されている。基調講演では、キャリアの意味とキャリア学習の意義についての講義を行い、生徒たちが自らのキャリアについて考えるためのワークを実施し、その後少人数のグループで共有してもらった。大学教授らによる特別講座は、複数の講座から生徒の希望するものを選択して受講した。インタビュー先については、保護者や卒業生、教師の伝手や生徒自らが開拓した先が含まれており、各グループで社会人が所属する組織へ出向き、インタビューを実施した。ポスター発表とプレゼンテーションは、各グループがインタビューした内容を独自の観点からまとめて発表した。

本研究では、高校生を対象にキャリア学習の実践的效果について検証することを目的とした。

研究1

目的

研究1では、高校生の働くことに関するイメージやキャリア選択自己効力感が、キャリア学習の前後でどのように変化するかを明らかにすることを目的とした。

方法

首都圏にある中高一貫校(A校)の高校1年生男子を対象に、キャリア学習のプログラム開始前(初日のホームルーム: Time 1、以下T1とす

表1 キャリア学習プログラム（5日間）

1日目	①キャリア学習に関する基調講演 ②基調講演の振り返り ③プレゼンテーション、ポスター、インタビュー準備について ④インタビュー事前準備
2日目	①インタビュー直前準備 ②大学教授による特別講座（学部別） ③特別講座の振り返り ④インタビューに行く①（グループ行動）
3日目	①インタビューに行く②（グループ行動） ②プレゼン・ポスター準備（グループ作業） ③インタビューに行く③（グループ行動） ④プレゼン・ポスター準備（グループ作業）
4日目	①プレゼン・ポスター準備（グループ作業） ②プレゼンのリハーサル（グループ作業）
5日目	①プレゼンテーション（1） ②ポスター準備 ③ポスターセッション ④プレゼンテーション（2） ⑤アンケート記入

る）と全プログラム日程終了後（5日目終了後：Time 2、以下T2とする）に、それぞれ同じ質問紙調査を実施した。調査は2015年5月に実施された。

調査項目は以下の通りであり、「働くことについての意識調査」という名称で実施した。

（1）働くことに関するイメージ

対象者にとって働くこととは何か、働くことのイメージを尋ねるため、「『働くことは～』から始まる文を、思いつくままにできる限り作ってください。」と教示し、最大10件の文章を完成するように回答を求めた。

（2）キャリア選択自己効力感

自らのキャリアを選択する準備や主体的な意思決定に関する自信の度を測定するため、花井・清水（2014）が高校生向けに開発したキャリア選択自己効力感尺度の計25項目を用いた。教示文は先行研究を踏襲し、「あなたは以下の項目についてどのくらい自信がありますか。1～4の中で、最もあてはまると思う番号を1つ選んで○をつけてください。」とした。また、回答方法は、1（自信がない）～4（自信がある）の4件法とした。

結果

調査の回答者は、T1が141名、T2が136名であった。

（1）働くことに関するイメージの変化

働くことに関する項目は、1つの刺激文に対する内容を1件とカウントし、T1の回答数は計733件（平均5.21件、SD: 2.61）、T2の回答数は585件（平均4.31件、SD: 2.45）で、T1よりもT2の方が、回答数が少なかった。

働くことに関する計733件の記述について、KJ法を援用し整理したところ、23件のカテゴリに分類された。T1の上位5位は、順に「お金を稼ぐこと」「骨を折ること」「社会に貢献すること」「楽しいこと」「重要なこと」であった。T2の計585件を上記のカテゴリにそって整理した結果、上位5位は、「骨を折ること」「お金を稼ぐこと」「生きがい・やりがい」「社会に貢献すること」「楽しいこと」の順であり、順位に若干の変化が見られた。また、T1からT2への変化を見ると、T1に比べてT2では「生きがい・やりがい」「自己を形づくること」「夢や希望をもつこと」に関する記述数が増加した。一方で、「お金を稼ぐこと」「骨を折ること」に関する記述数が減少する結果が示さ

表2 働くことに関する記述内容

カテゴリ	T1_出現率		T2_出現率	
お金を稼ぐこと	120	16.4%	62	10.6%
骨を折ること	105	14.3%	68	11.6%
社会に貢献すること	74	10.1%	45	7.7%
楽しいこと	42	5.7%	45	7.7%
重要なこと	41	5.6%	33	5.6%
生きること	37	5.0%	32	5.5%
家族を養うこと	36	4.9%	33	5.6%
自分のために努力すること	32	4.4%	32	5.5%
義務や責任が伴うもの	31	4.2%	25	4.3%
自己を形づくること	30	4.1%	40	6.8%
人や社会とつながること	30	4.1%	20	3.4%
面倒なこと	23	3.1%	13	2.2%
生きがい・やりがい	21	2.9%	54	9.2%
奪われること	20	2.7%	2	0.3%
夢や希望をもつこと	19	2.6%	27	4.6%
自分を活かすこと	19	2.6%	16	2.7%
不快なこと	15	2.0%	8	1.4%
意味・価値あること	9	1.2%	7	1.2%
競うこと	9	1.2%	4	0.7%
つまらない	7	1.0%	4	0.7%
無意味なこと	6	0.8%	2	0.3%
分からないもの	6	0.8%	0	0.0%
その他	17	2.3%	19	3.2%
計	733	100.0%	585	100.0%

れた(表2)。

(2) キャリア選択自己効力感の変化

キャリア選択自己効力感の25項目について、対応のある t 検定を行った。その結果25項目のうち21項目で、T1よりもT2の方が、有意に得点が高かった(表3)。

また先行研究に基づき、キャリア選択自己効力感を5つの構成要因ごとに分析を行ったところ、「自己評価 ($t(124)=3.45, p<.001$)」「目標選択 ($t(123)=4.13, p<.001$)」「計画立案 ($t(125)=5.70, p<.001$)」「情報収集 ($t(125)=3.17, p<.01$)」「意志決定 ($t(127)=3.77, p<.001$)」の全ての要因において、T1よりもT2の方が有意に得点が高かった(表4)。さらに効果量Hedges' g は、計画立案が中程度、その他の要因は小程度の値を示した。

考察

働くことのイメージの変化は、キャリア学習前

後の文章完成法による記述内容の比較から、高校生が働くことに対して、よりポジティブなイメージを持つようになったと考えられる。実際に社会人経験のない高校生は、働くことに対してネガティブなイメージを持ちやすく、よりポジティブなイメージを持てるようになることで、今後のキャリア選択に良い影響を及ぼすことが期待できる。

キャリア選択自己効力感は、T1からT2へと有意に高くなっていることから、キャリア学習に一定の効果が見られたと考えられる。しかし、直後効果の可能性も考えられることや、キャリア教育を長期的視点から捉えるためにも、その効果についてさらなるフォローアップが必要と考えられる。

表3 項目別平均値の比較

変数	項目	平均値		(SD)	
		T1	T2		
自己評価	3. 自分の性格を理解すること	2.82	2.97	(1.01)	<i>n.s.</i>
	8. 仕事をするうえで自分の長所と短所を理解すること	2.85	3.06	(0.96)	**
	13. 自分の得意・不得意を理解すること	3.08	3.08	(0.96)	<i>n.s.</i>
	18. 自分自身についてより深く理解すること	2.64	2.94	(0.95)	***
	23. 自分の適性を理解すること	2.76	3.03	(1.02)	***
目標選択	1. 将来、なりたい自分を明確にすること	2.59	2.92	(0.95)	***
	6. 仕事に対する自分の興味を理解すること	2.97	3.20	(0.97)	***
	11. 今後の人生で、自分が何をやりたいのかを明確にすること	2.69	2.99	(1.05)	***
	16. 将来従事したい職業が何なのかをはっきりさせること	2.69	2.91	(1.03)	**
	21. 自分にとって理想の職業とは何かを明確にすること	2.78	3.04	(1.06)	***
計画立案	4. 就職活動について具体的な計画を立てること	2.38	2.85	(1.03)	***
	9. 将来のために今やっておくべきことの計画を立てること	2.42	2.83	(0.98)	***
	14. 将来、なりたい自分に必要なことを身につけるための計画を立てること	2.54	2.79	(1.00)	***
	19. 進路目標を達成するために、計画を立てること	2.52	2.80	(0.91)	***
	24. 就職活動をうまく進めるための計画を立てること	2.45	2.83	(0.87)	***
情報収集	2. 自分の職業選択に必要な情報を得るために、新聞・テレビなどのマスメディアを利用すること	2.73	2.98	(0.98)	***
	7. 職業情報を得るために、インターネットを利用すること	3.12	3.13	(0.96)	<i>n.s.</i>
	12. 自分が就きたい職業の採用状況に関する情報を入手すること	2.73	2.95	(0.97)	**
	17. 興味ある組織では、どのような人材を必要としているのかを調べること	2.82	3.02	(1.08)	**
	22. 興味ある職業分野の会社や組織に関する情報を入手すること	2.78	2.98	(0.82)	***
意思決定	5. 就きたい職業に就けるのであれば、少々苦勞でも我慢すること	3.24	3.28	(0.89)	<i>n.s.</i>
	10. 本当に好きな職業に就くためなら、努力を惜しまないこと	3.06	3.26	(0.92)	**
	15. 自分で決めた志望職業を実現するために意志を貫くこと	2.86	3.14	(1.03)	***
	20. 困難な問題が生じても目標とする職業に就くために頑張ること	2.88	3.15	(0.89)	***
	25. 志望職業に就くために粘り強く頑張ること	2.84	3.20	(1.00)	***

p* <.01, *p* <.001

表4 キャリア選択自己効力感の変化

	Time	N	M	SD	<i>t</i> 値 (<i>df</i>)	Hedges' <i>g</i>
自己評価	T1	125	2.83	0.64	-3.45 **	-.308
	T2	125	3.04	0.69	(124)	
目標選択	T1	124	2.74	0.73	-4.13 ***	-.370
	T2	124	3.02	0.74	(123)	
計画立案	T1	126	2.46	0.64	-5.70 ***	-.506
	T2	126	2.83	0.73	(125)	
情報収集	T1	126	2.84	0.61	-3.17 **	-.281
	T2	126	3.03	0.69	(125)	
意志決定	T1	128	2.98	0.78	-3.77 ***	-.332
	T2	128	3.21	0.78	(127)	

調査は2016年5月に実施された。

研究2

目的

高校1年時のキャリア学習での学びが、その後どのように活用されているのか、また活用されていない場合の理由を明らかにし、今後の支援や教育に向けた示唆を検討することを目的とした。

方法

調査は、首都圏内にある中高一貫校（A校）の高校2年生男子を対象に、キャリア学習の1年後に質問紙調査を実施した。調査内容は、(1) キャリア選択自己効力感に関する尺度への回答（4件法）と、(2) キャリア学習後の状況について尋ねた。(2)については、「昨年のキャリア学習で学んだことは、現在活かされていますか」と教示し、「A. 活かされている」または「B. 活かされていない」を選択してもらった。Aを選択した場合は、「キャリア学習でどのようなことを学び、その後それがどのように活かされているのか具体的に書いてください」と教示した。Bを選択した場合は、「なぜ活かされていないと思うのか、その理由を書いてください」と教示し、それぞれ自由記述形式で回答してもらった。調査は前回と同様に「働くことについての意識調査」という名称で実施した。

結果

調査の回答者は138名であった。

(1) キャリア選択自己効力感の3時点の変化

今回の調査ではデータの対応づけが出来なかったため、各時点全体の平均得点について、前年度（高校1年時）に実施されたキャリア学習の前後（T1、T2）と1年後（高校2年時）（T3）の3時点を個人間で比較した。その結果、キャリア学習の前後で生徒の自信は一旦高くなったものの、1年後にはキャリア学習前とほぼ同じ状態またはそれ以下に下がっていた（表5）。

(2) キャリア学習の1年後の効果

回答者138名のうち無記入の10名を除き、128名について自由記述の分析を行った。キャリア学習で学んだことが現在「活かされている」と回答した生徒は、128名中41名（29.7%）、「活かされていない」と回答した生徒は87名（63.0%）であった。

「活かされている」と回答した生徒41名の回答について、キャリア学習で「学んだ内容」と「学んだことをどのように活かしているのか」に関する自由記述をKJ法を援用しまとめた。学んだ内容は9項目（仕事の知識や現実、やりがい、仕事の大変さ、仕事をする意味や重要性、企業や社会の仕組み、仕事への姿勢、将来について、将来を

表5 キャリア選択自己効力感の3時点の変化

		平均値	標準偏差
自己評価	T1	2.82 [）] _{***}	0.63
	T2	3.03 [）]	0.68
	T3	2.81 [）] _{***}	0.72
目標選択	T1	2.74 [）] _{***}	0.74
	T2	3.00 [）]	0.73
	T3	2.59 [）] _{***}	0.78
計画立案	T1	2.45 [）] _{***}	0.64
	T2	2.83 [）]	0.72
	T3	2.46 [）] _{***}	0.76
情報収集	T1	2.84 [）]	0.61
	T2	3.02 [）] _{***}	0.68
	T3	2.64 [）] _{***}	0.68
意思決定	T1	2.97 [）] _{***}	0.77
	T2	3.20 [）]	0.78
	T3	2.80 [）] _{***}	0.80

注) 対応ないデータのため、全体の平均値の変動より算出。

考える機会、その他)に整理され、約半数の生徒が「仕事の知識や現実(48.8%)」について学んだと認識していた(表6)。また、学びの活用法は8項目(将来への関心、将来の明確化、将来に向けての活動、学ぶ意欲の高まり、仕事・社

会への興味、社会人の思い、自信をもつ、その他)に整理され、約3割の生徒が「将来への関心(31.7%)」や「将来の明確化(29.3%)」につながっていると認識していた(表7)。一方、学んだことが「活かされていない」と回

表6 学んだ内容

学びの内容	記述例	出現率 (%)
仕事の知識や現実	・一流の商社マンに出会い、知識や経験がすごいと感じた ・テレビの裏側のことが理解できた	20 (48.8)
やりがい	・仕事の内容、やりがい ・仕事には上手くいくことも、いかないこともあるが、やりがいのあるもの	8 (19.5)
仕事の大変さ	・働くことの大変さなどを学んだ ・仕事の難しさ	7 (17.1)
仕事をする意味や重要性	・仕事をする意味 ・社会に参加することの重要性	7 (17.1)
企業や社会の仕組み	・その企業ではどのような人材を必要としているか、企業の取り組みや目標 ・金融、特に保険業についての仕組み	4 (9.8)
仕事への姿勢	・自分に関係のある人脈の拡大、中途半端で止めずにやり切る ・医学について、人の命の大切さ	2 (4.9)
将来について	・将来について	1 (2.4)
将来を考える機会	・自分がどのような人間で、どのような職業が自分に向いているのかを考えること	1 (2.4)
その他	・自分のプレゼンテーション能力を知ることができた ・実際に働いている人の今の高校生に対する意見	5 (12.2)

表7 学んだことの活用法

学びの内容	記述例	出現率 (%)
将来への関心	・学校生活を通して将来について考える ・具体的に将来について考えられるようになった	13 (31.7)
将来の明確化	・自分の将来を決める要素になった ・自分がどのような企業に就職して、どのような仕事がしたいか今までよりも明らかになった	12 (29.3)
将来に向けての活動	・自分の就きたい職業だと改めて感じ、目標に向かって勉強できている ・改めて業界という世界に興味を持った。この職業をしてみたいと思った。そのことについて調べてみた。	9 (22.0)
学ぶ意欲の高まり	・学ぶ意欲につながった ・自分の将来の夢に対する意識が変わり、これからの受験勉強に対する覚悟が決まった	7 (17.1)
仕事・社会への興味	・現在、注目されているIOTなどのニュースに関心が持てるようになり、今後のネットワーク分野における成長に興味があった ・自分の大学での進路について、将来なりたい職業を意識して考えるようになった	7 (17.1)
社会人の思い	・どのようなことを事を思っているのかを知れた	1 (2.4)
自信をもつ	・自分に自信を持つことができたため、勉学への意欲が上がり、勉強がはかどるようになった	1 (2.4)
その他	・とてもいい経験になっている ・たくさん、いっぱい	5 (12.2)

答した87名について、その理由に関する自由記述をまとめたところ、12項目（機会がない、生活との関連がない、希望や興味と違った、興味がなかった、変化がない、目標が不明瞭、将来的なもの、目標が変化した、時間がない、知りたいことが分からなかった、自分のことが分からなくなった、その他）に整理された（表8）。2割前後の生徒が「機会がない（24.1%）」「生活との関連がない（19.5%）」ことを理由としてあげていた。

考察

以上の結果から、自らのキャリアを選択する準備や主体的な意思決定に関する自信は、キャリア学習を実施することで一定の効果が見られたものの、キャリア学習が行われない高校2年生になると元の状態に戻ってしまうことが示された。全体的な効果としては、高校1年時の一時的な活動と認識されている可能性がある。本研究(T3)のデータについては、T1・T2との紐づけが出来なかったため、個人間の分析結果となっており、今後長期的に個人内の変化をみることで、キャリア学習

表8 学んだことが活かされていない

活かされない理由	記述例	出現率 (%)
機会がない	・学んだものを活かす機会がない ・まだその仕事について学ぶことを活かす機会がないから	21 (24.1)
生活との関連がない	・キャリア学習で学んだことを日常生活で使っていないから ・社会についてよく知ることができたが、学校生活が基礎になって過ごしているため、まだ活用させる機会がないから	17 (19.5)
希望や興味と違った	・選択した職を間違えた ・キャリア学習で学んだことと、自分の就きたい職業が全く関係ないため	11 (12.6)
興味がなかった	・特に興味のない仕事の話を聞いたから ・そこまでやりたいという職種ではなかったから	11 (12.6)
変化がない	・キャリア学習後、あまり関係があることに取り組んでいなかった。調べたままにしてしまっていた。 ・キャリア学習の前後で、意識の変化がないから	10 (11.5)
目標が不明瞭	・まだ将来何になりたいか決まっていなかったから ・キャリア学習は、将来自分がどんな職業に就くのかを考える場であり、現在の学生生活をどう過ごしていくのかは志望職業が明確になったときに考えるものだと思うから	9 (10.3)
将来的なもの	・難しい分野であるため、すぐに学んだことを生活に反映させるのは難しいから ・社会人になったら生きると思うが、学生の間ではそれが難しいと思うから。	8 (9.2)
目標が変化	・自分のなりたいものが、昨年から大きく変わったから ・キャリア学習で調査した内容に興味をもったが、それよりも明確ではないが、やりたいことが見つかったから	5 (5.7)
時間がない	・現在は時間がないので、いかされていない ・経験したことを応用したり、追体験したり、しっかりと思考することなく、別の何かに追われる日々なので、振り返る時がない	4 (4.6)
知りたいことが分からなかった	・インタビュー先の人たちがその職業にどうしてついたのかという理由があいまいだったから ・結局、その仕事の大変さ、またその仕事につくにはどのようなことをしていけばいいのかわからなかった	4 (4.6)
自分のことが分からなくなった	・更に自分のことが分からなくなったため	1 (1.1)
その他	・特に何にも考えていないから ・その後に働くことについての学習を全くしていないから	15 (17.2)

の効果が持続する者とそうでない者の違いを明らかにしていくことが期待される。また、1年次にキャリア学習に参加していないと思われる10名のデータが全体的な結果に影響を及ぼした可能性も考えられる。

一方、キャリア学習1年後の効果について、3割の生徒が学んだことを活用していると回答していた。仕事の知識や現実、やりがいや大変さ、働くことの意味などを学び、将来への関心や行動に加えて、学ぶ意欲や仕事・社会への興味を示しており、キャリア学習を自分事と捉え主体的に取り組んだ生徒については効果が見られたと考えられる。また、学んだことが活かされていない理由として、学んだことを活かす場や生活とのつながりが見えないことが挙げられた。キャリア学習は、生徒の将来への関心や目標の明確化につながる反面、学んだものを活かす機会や時間がないこと、学生生活との関連が見出せない生徒も多く見られた。今後、キャリア学習の効果を持続するためには、1年生だけでなく、2年、3年と継続的に自らの将来について考え、他者から学ぶ機会を提供することが重要であると考えられる。

総合考察

本研究では、高校1年時のキャリア学習前後の変化と、1年後（高校2年時）の効果についての検討を試みた。プログラム前後の変化として、直接社会人へのインタビューを行うことで、働くことに関するポジティブなイメージが増加し、キャリア選択に対する自信が高くなった。生徒たちは、5日間にわたり4～5名のグループで事前準備、インタビュー、発表会等の活動を互いに切磋琢磨することで、仲間とともに乗り切ったという自信を獲得している可能性も考えられる。一方で、インタビューに際して自分の希望する職業とは違う社会人の話を聞かなければならなかった生徒も一部存在し、本人の希望との齟齬があった場合でも学びが得られるような工夫が必要と考えられる。プログラムの導入においては、キャリア学習の目的を明確にしたうえで、講師や社会人への依頼に際して、インタビューで話してもらった内容を十分

に詰めておく必要がある。また、プログラム終了後に生徒たちが自身の学びをどのように実践につなげていくことが出来るのかを振り返って考える機会を設けるなども考えられる。

キャリア学習プログラムは、生徒の将来への関心や目標の明確化につながる反面、学んだものを活かす機会や時間がないことや、学生生活との関連が見出せない生徒も多く見られたため、1年間の間に他のプログラムの実施を検討する必要性があると考えられる。学年が上がるにつれて大学進学がより現実味を帯びていく中においては、希望する学部の授業を受講したり、その学部で学ぶ大学生へのインタビューを実施したりするとともに、自らの興味・関心を引き出すワークなどの取り組みが考えられるであろう。

今後は、キャリア教育の効果を持続または高めるために、キャリア学習で得られた学びを個々の生徒が意味づけ、日常生活や学びの場に転換していくための新たな工夫や取り組みが重要であると考えられる。

本研究の限界と今後の課題

本研究の限界と今後の課題として、以下の点が挙げられる。

第1に、T1からT2へのキャリア学習の効果に関して、直後効果と見られる影響が確認された。しかし、T3のデータについては紐づけが出来なかったため、フォローアップにおける個人内の変化を分析することが出来なかった。今後はより長期的な学習の効果を含めた個人の変化を把握していくことが求められる。第2に、本研究はキャリア学習の一部プログラムに対する依頼を受け実現したものであり、プログラム開発等には携わっていない。これらの結果を教育現場にフィードバックすることで、さらに生徒にとって効果が実感できるような取り組みを、現場の教師が実践することが期待される。

引用文献

国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター（2013）キャリア教育・進路指導に関する

- 総合的実態調査 第一次報告書
- 文部科学省（2000）「高大連携を活かした青年期のキャリア形成に資する教育課程の研究開発：理念、特徴、成果と展望を中心に」名古屋大学教育学部附属中・高等学校 藤田高弘副校長発表資料〈http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/ikkan/7/06021303/001.pdf〉
- 文部科学省（2011）中央教育審議会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」（2011年1月31日）〈http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2011/02/01/1301878_1_1.pdf〉
- 文部科学省（2018）「高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説」（2018年7月）〈https://www.mext.go.jp/content/20211102-mxt_kyoiku02-100002620_1.pdf〉
- リクルート進学総研（2014）高校の進路指導・キャリア教育に関する調査
- 酒井淳平・河井亨（2015）高等学校におけるキャリア教育授業の実践による生徒の変容」立命館高等教育研究, 15, 145-160.

[抄録]

本研究の目的は、高校生に対するキャリア学習の実践の効果を検証することである。研究1では、キャリア学習前後の変化について検討し、プログラム実施後は働くことのイメージがポジティブに変化し、キャリア選択自己効力感が高まった。研究2では、1年後の効果について検討し、キャリア選択自己効力感は、プログラム実施前の状態に戻っていた。しかし、キャリア学習の効果を認識する生徒は、将来への関心や目標の明確化につながる反面、学んだものを活かす機会や時間がないこと、学生生活との関連が見出せない生徒も多く見られた。これらの結果から、生徒たちがキャリア学習の学びを自ら意味づけ、日常生活や学びの場に転換していくための取り組みの重要性が示された。
